

明治二十六年下船し二人は日本用独歩兄弟がいたといふことにならう。

さうして日清戦争中佐伯回清合資会社を設ける運びとなり、反小栗氏を命により、大阪商船社長中橋徳五郎へ後文部大臣、政友会代議士への許に、三代目弥吉(後小栗藁名)が遊学に行つたのは大正五年頃であつた。

前述した通り、初代弥吉氏が藤巻の線を張つた十一年から十六年にかけて、佐伯町と葛の道は逆じた。明治三十一年葛巻道と命名されたものは、国道三十六号線(現在の国道十号線)の前身から上岡までであつたのを、上岡より阜頭まで接合し落成し左のは明治三十六年であつた。この間さまの明治二十五年八月平岡港に先立つて、同年の警報傳号機、建設となり、大分陸羽築に先立つてと約三十年前にして測候し、その後二十年を経て葛巻と起点として国道と結ぶ道路の幹線は成つたのである。

(大分港は明治四十二年二月一日大分藩蔵意見書と知事に出し、四十二年二月藤巻の許可を内務大臣に受け、四十五年三月十日藤巻の企業式を挙げられたるなり)(佐伯蔵築建設)

(つづく)

紀行

藤河内から北川へ

文 羽 柴 弘
俳句 吉 田 雅 雄

七月二十七日 日曜 快晴

一昨年承の念願を胸に高水会長以下二十人の会員を乗せたマイク口バスは、路を見明峠にとつて字目に入る。

塔敷基大はなればの下の古(八月)長良子

塩見園から重岡に出て、女性キリシタン「るいざ」の

墓を訪う。比類ない立派なものである。

草の露るいざと読める耶蘇の墓 同

重岡から田原に出て北川ダムのはもとを車は走る。こへをたどり、すべて山文山。谷間には水田が開けている。

山源き藤原らうさ田も昔田 同

藤ノ原より北川を歩み、藤川内ハ溪谷に入る。

岩置走る清水を掴みもして 同

岩に咬く小草に清水 飛沫して 同

清らかな谷の底には汗を洗い、楽しい昼食をする。茶寮昔平川会員(夫人)の谷がかないのかさひい。午後一時半一行は車に乗り北川の流氷にそって、一気に熊田まで出、国道を下って俵野に至り、西南後西御薩盛藩陣の家に数々の遺品など見、程近い裏山の墳々件尊中陵伝説の古墳を訪ぬる。

南洲に二夜宿せし夏産敷 同

それから引返し、熊田に戻り川向うの古禅寺にまいる。ここにも南洲は一晚とまつている。南洲が用いたという古風な茶碗など鉢見する。

この日最後の探訪先氏市棚敷から川を隔てて、程近い瀬口の「かとうさま」。長高知の峯で最期をこけた佐伯惟治の頭を葬つたとの伝承の地。小さなお堂に惟治の戒名など記した墓石二基があり、堂の後に宝篋印塔が一基。

花塔とまとい首塚朽ち欠けし 同

蚊の藪や塚守り継ぎし琵琶法師 同

なにしろ日照りつつき盛夏、字目から北川の道のほこりと暑さにいささか疲れる。然しほんとはよい探訪の旅で、六時前に佐伯に帰着した。(おわり)